

俳句雜誌

空



2018・12

SORA 82号

空

平成30年12月31日発行

第16巻6号

通巻第82号

北九州 横田敬子

形代にまづ母の名を書きにけり

留守番の猫に冷房つけておく

墓洗ふ届かぬところそのままに

蛇過ぎしあとの草むらうねりけり

父のこと忘れゆく母草の花

粕屋 秋 千 晴

裏庭の野菜を揃へ盆用意

蛇口より西瓜の縞の広がれり

帰省の子碁盤に頭寄せ合へり

棕櫚箒より蟋蟀の飛び出せり

かくれんぼしてゐるつもり秋簾

直方 吉田悦子

雨音のはじめ静かに大夕立

闘病の妻の名記す形代に

夫に背をさすられし日も夏の風邪

嘘つけば増ゆる口数蚯蚓鳴く

幼子の抱かれて山車の列に入る

長崎 仲里奈央

二度見する人事異動や休暇果つ

反り合はぬをんなどをんな放屁虫

身に沁むや返信はもう無きものと

虫の声些細なことは気に留めず

秋風や今更解る胸の内

福岡 あさなが捷

春日 三井所美智子

看護師の脈取る指や西日さす

今朝秋の雲入れ替はる背振山

高窓に月をさまりし入院日

面浮立果てて素面の同級生

病室の寢息は三つ月さやか

町長は平家の子孫赤のまま

血管を探る看護師冬ぬくし

底紅や憎らしいほど元気な姉

鯛焼のやせ鯛焼に寄りかかる

猫に足甘噛みさるる文化の日

糸島 小林 朱 夏

福岡 永 淵 惠 子

秋麗や葉抱へて退院す

極暑なほ引つ越しの荷のうづ高し

北吹いて二つになりし鳥の群れ

短夜を空騒ぎして付喪神

宝船見果てぬ夢へ舵をきる

太鼓打つための帰省でありにけり

初みくじ九十の母に良縁と

生身魂酔うて戦を語りけり

窓小さき神馬の厩春の雪

影もたぬものも混じりて踊りけり

兵庫 青木 朋子

両手足ぐんと真向かふ大瀑布

木々の影乗せて大滝どうと落つ

滝壺に次々水の飛び込めり

滝飛沫総身くまなく浴ぶるまで

離れても滝の飛沫のなかにをり

宮崎 田代 民子

百歳へまだ間のありぬ菊の酒

暗んずる般若心経涼あらた

秋果とりどり仏壇のコンサート

ほとけと頷つ駅弁の茸飯

罪科めく重陽の日の吹き降りは

北九州 河原 敬子

帽子取り正しく茅の輪くぐりけり

生き生きと氏子はたらく夏越祭

山鉾を押す若者ら伏す姿勢

おとうとの祭法被の紐直す

祝砲に応ふる汽笛浦まつり

岡垣 田中とし江

あいの風ごと菩提寺の門抜くる

蔵に吊る小舟で行かむ天の川

休暇明乾ききつたる校舎かな

色鳥を土ふつくらと葬れり

月光やものの影みな立ち上がる

直方 石橋 幾代

炎昼や石油タンクのゆらぐ空

冷しゐる西瓜水ごと上げにけり

くちなはの通りし径の蒼みけり

日の力抜けたる山の滴れり

岸壁を削りしほどの滝落つる

神奈川 窪 みち子

ほほづきも火星も赤く盆が来る

美女平消しつつ霧の這うて来し

霧しぐれ北山杉は音立てず

放課後のプール蜻蛉が水叩く

父の膝で父のどぶろく嘗めしこと

須惠 苑 実 耶

前列に長老の座す報恩講

雑然と積まれ誓文払ひかな

遅れ来てすぐ馴染みたる忘年会

級友は挙りて白髪冬ぬくし

クリスマスカードを添へし病院食

京都 天谷 翔子

桃食べし躰に蜜の満ちてゆく

口説かれてゐるらし月がまんまるし

爪染めてみたし実紫をつぶし

口数の少なきふたりばつたんこ

纏れたる蔓のほどけぬ真葛原

大阪 井上 和子

ゆくりなき帰省の数珠を携ふる

盆の月故郷の駅乗り過す

故郷や茶毘待つ間の蟬時雨

虫すだく夜伽に死者の武勇伝

一夜さに見送る命雁の声

兵庫 えとう 樹里

秋立つや物捨てきりしこの家に

秋風やつくも神にも別れ告げ

空耳の電話鳴り出す今朝の秋

もういらぬ鍵の鈴鳴る赤とんぼ

食卓は大型ごみや秋の雨

北九州 大西 乃子

行くほどに遠のく雲や風は秋

山垣のさらに奥あり稲光

行進の百のくるぶし運動会

出来秋や雀に雀加はりて

ままごとの一人二役秋桜

大阪 田岡 千章

手火花や燐寸の函にベティさん

忘るるを遠稲妻に甦る

曳綱の張りを加減に処暑の犬

地藏会の鉦打ちをの子才気かな

一塔のうしろに一塔稲の花

東京 遠山のり子

薄紅葉朱塗りの橋を渡り来て

一望の武蔵野台地豊の秋

豊の秋ミレーの描く農婦たち

合歓の花岸辺の灯ゆらめける

飛ぶ鳥の影の映れる花野かな

兵庫 岩井京子

断りつつ断りつつも踊へと

捨て果皮に潜みて居りぬかぶと虫

蟬の声ややおとろへし朝の森

弱りたる蟬わが元へ歩み来ぬ

入れし手を棘が刺す柚子挽ぎにけり

兵庫 兒玉充代

鱗雲猫の鼻先濡れてをり

秋暑しいいえいえと問診票

庭下駄の湿りてをりぬ昼の虫

夏の果て翅もつものは仰向けに

底紅や百歳の女はにかめる



空集抄
—
柴田佐知子抽出

羅針盤海底にあり終戦日

高倉和子

空蟬にいのち半分置いてゆく

秋 千晴

ぎりぎりまで目高片寄せ水替ふる

岸 洋子

初日の出沖の船ごと拝しけり

小林朱夏

木の葉髪句帳は身分証明書

中田みなみ

揚花火一塊の闇皺くちやに

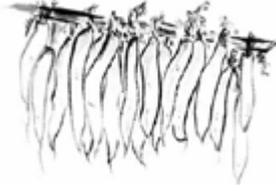
戸栗末廣

枝豆の皿枝豆の莢の皿

角野良生

炎天や貨車連結の錆こぼす

深川淑枝



溢蚊が地下足袋洗ふ外流し

鶏が斜面を跳びぬ太閤忌

声かけてくる人なき夜なべかな

もう想ひ出してもやらぬ髪洗ふ

砂をかけ火をなだめたる芋煮会

弓なりに吹かれてゐたる秋簾

長き夜の息もつかせぬ立志伝

惑星の水揺らしをり田植唄

猪垣の内へと伸ぶる盆の路

秋霖や納戸に母の車椅子

鮎釣や無言の行の一人ひとり

親の脚くぐるきりんや秋うらら

原 友子

吉田 菫

石橋幾代

仲里奈央

松田明子

曾根富久恵

永淵恵子

栗原京子

山本則男

林 徹也

田代民子

河原敬子

象の鼻麒麟の首や秋高し

横田敬子

遠雷や言葉は独り歩きして

山内碧

毒茸のすでに蹴られてまた蹴らる

千波悠

石庭に箒目新たもみぢ散る

苑実耶

一斉にふはつと沈む稻雀

小島翠波

秋晴や全面ガラスの博物館

青木朋子

月代やしやべり尽くして友帰る

岩下きぬ代

草も木もじつとしてゐる残暑かな

大西乃子

梯子とは身軽な形すいと鳴く

西住三恵子

人去りし椅子に香水匂ひけり

井上和子

身をねぢり蛇口より飲む日の盛り

宮川正彦

梅雨出水避難を拒む母諭し

吉田悦子



桔梗や母の日記に遺句足して

鈍行の十分停車秋うらら

蝸や手ぶらで戻るひとり旅

あるだけの枕ならべて盆の家

病室のカーテン越しの林檎の香

騎馬戦に応援団長運動会

ハモニカの音の中なる赤とんぼ

種馬に時間割あり夏の山

弾みつけ雀翔び立つ秋日和

水飲みに汗まみれなる子が戻る

絨毯の半分猫が使ひけり

背負はれて笑ふ赤子や稲熟るる

えとう樹里

田中とし江

田岡千章

星加鷹彦

むつみ蓮

村上二三

押田裕見子

古賀真理

本多トミ

畑由子

西浦優

倉智万数雄

空 作 品 評

柴田佐知子

羽化の蟬翅の先へと脈通す
空蟬にいのち半分置いてゆく

秋 千晴

千晴さんは、羽化の始まった幼虫をずっと見続けていたのだ。幼虫の背が割れ、緑がかった白くやわらかな蟬が現れてくる。体の横に付いているくしゃくしゃのかたまりが翅だ。胴も縮んだ翅もまだふにゃふにゃだ。

一句目はその翅を伸ばしてゆく様を活写。時間をかけて折り畳み傘が開いてゆくように翅を伸ばしてゆく。葉脈のような筋があたかも傘の骨のように翅全体にひろがる。羽化の時、翅脈というこの筋に体液が流れ込み翅をぴんと伸ばし切るのだ。平らに伸びきった生まれたての翅は、緑を帯びて透き通りまことに美しい。この様子に見入った無心の極みに「翅の先へと脈通す」という言葉を得たのだと思う。余計な言葉が一切ない見事な表現である。

二句目、羽化した蟬の翅は次第に黒ずんで見なれた蟬の姿となりやがて飛び去ってゆく。あとには眼や足の先まで幼虫の姿を緻密にとどめる脱け殻がいつまでも草木にしがみついている。「命」という言葉は安易に詠みこむと句から浮き上って大仰な印象を与えることがあるのだが、掲句にはそのような響きがない。羽化の実相を見届けた作者の心からの言葉が「いのち半分置いてゆく」だったからだ。「半分置いてゆく」には身を震わせながら殻を抜け出る羽化の前後の蟬の姿と時間が籠っている。選び抜かれた言葉に血が通っている。

千晴さんの二句は、眼を凝らしてじっくり見ることによって、自分の内なる促しに呼び覚まされて詩に結実したような作品である。見たものをただ並べただけでは、説明や報告の域を出ることができない。見たものを自分の内に落とし込み自分の言葉で表現しようという意志が必要だ。飾りたてず真つ直ぐ端的に詠めたらと思っている。

（以下略）

空集

柴田佐知子選

能面に死相のありて青葉の夜 福岡 高倉和子

息つめて夏草の中通りけり

ふるさとや寝転んで見る天の川

蚊帳吊れば納戸の匂ひしてゐたり

竹婦人出番なきまま色変はる

昼寝覚母のなき世に戻りけり

日輪の芯の黒さや原爆忌

炎天の砂場に立てる赤シャベル 粕屋 吉田 菫

泣きながら子がざり蟹をふり上ぐる

大寺の裏手に吊す浮輪かな

日当りて風鈴の音の濁り出す

川床遊び吐息めきたる京ことば

相聞の歌の真中を紙魚走る

パンプスの上司近づく油照

きつぱりと断られたる涼しさよ 福岡 岸 洋子

人去りて海匂ひけり夏座敷

ぐいと川曲ぐる大岩灼けてをり

足の甲子蟹が越えてゆきにけり

錆び鉄鎖磬に食込む梅雨最中

掌に余る下足の木札どぜう鍋

大見得をきつて果てたる夏芝居

鶏の声裏返る猛暑かな 糸島 小林朱夏

手が止まる微分積分雲の峰

蝸や遺影が並ぶ母の家

秋の昼母がつぶやく己が歳

稜線の少し沈みて柿熟るる

鱸酒や女所帯に慣れて久し

蒲団干す母の匂ひをそつと嗅ぎ

鉄骨に真赤な月や出水引く 東京 中田みなみ

打水や路地の稲荷に風曲り